

ち、ぶ日記

葉月十一日

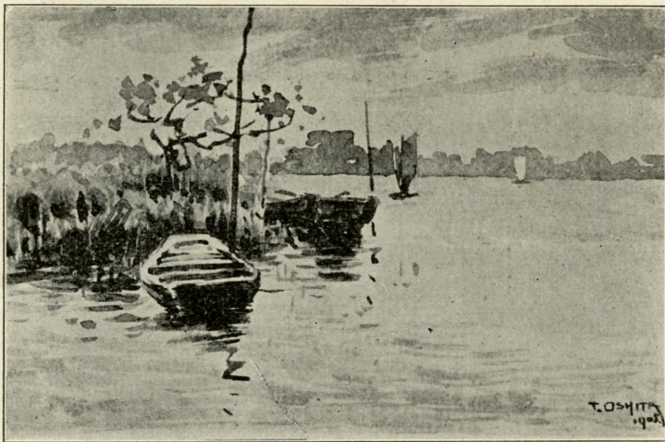
はれ、昨日見



し瀧寫さんと思ひて六時  
頃山を辭す。鳥居をはな  
れ下りゆくに傾斜急にし

て靴にてのあゆびいと便なし。ある時は  
走りて木の幹に身を投げかけ、ある時は  
傘を力に足を横さまにして下る。疲れ甚  
しく汗とめ度なく流れぬ。漸くにして瀧  
ある處に到るに、谷深ければ日は未ださ  
ゝず、わたり小闇く水の音しめやかに物  
淋しさたとへがたし。長き橋の申程に三  
脚据えて寫生を試みしが、櫛の落葉の風  
に音するをも、大蛇など出てしにやと怪  
しまれて心おち居ず。山の小僧の、さき  
つ頃日暮れて歸る時、このほとりより山  
狗につけられ終に頂上迄去らざりしよ  
し、昨夜きし話も思ひ出されて、心弱  
しと自ら嘲けりつゝもなほ四方の見らる  
ゝ心地すなり。さらぬも汗になりし身の、  
この朝涼に冷え渡りて自からうち慄はる  
ゝに、久しく居るに耐えて、瀧は只其趣を模せしのみにて筆を

汀 登 生



收めぬ。

これよりは急ぎ山を下り、荒川の岸にお  
り立ちて大岩小岩の水と戦ふさまを寫  
す。前面青緑の山屏風を建てし如く壓し  
て、空なく遠景なく作畫尤も困難を覺え  
ぬ。

繪成りて後橋の傍の茶店に入りて休む。

したゝかに茶を飲み菓子を取りて、さて  
開うち立んとて懐さぐるに細き錢なし。剩  
田錢ありやと問へば無しといふ、やうく  
川にかき集めて菓子代丈け調へしが、茶  
の料さし置かて去りゆく心若しさ、河原  
スの寫生にも増して耐えがたかりき。

暑く苦しき山路幾里、晝過る頃贅川の角  
ツ六に着きぬ。程なく烈しき夕立のありて、  
樹々の緑は洗はれて美はしく、かの見晴  
しよき部屋には隅々迄も涼氣満ちて今朝  
の疲勞を忘れしめたりき。

十二日 晴、寫生すべく出たゝん勇氣  
もなければ、坐敷に在て前に見ゆる大景  
を寫す。四五時間にして漸く成れり。此

わたり折からの盆休みとて近き家々の小

娘五六來りぬ、何れも今日を晴れと粧ひて罪なきことども語り

合ふ。菓子など求めて頑ち與へ、くさくさのと問ふに、たゞうちへみて答へぬもあり、さし出ても語るもあり、とり／＼に愛らし。その中にやゝ年たけてはあれど、勝れておちつきありて、語るともいやしからず、床しきふし多き少女あるに、この地の名ある人の娘にもやと思ひて、宿の人に問へば、たゞの農夫の娘なれど、父なる人は村に珍らしくも學問ある男にて、庭の教へも常日頃よく行届きおれりといふ。實に氏よりも育ちといふは尤もなりとつなづかれぬ。

十三日 ばれ、足痛みてあゆみ難ければ、俵屋はんとするに此地には無しといふ。折々大宮より上り來る歸り俵ありといふに、待てども今日は來らず。此家の勝手元の有様など寫して永き日か暮しつ。今日も前山雲たちて雷鳴すさまじく、折々雨ありていと涼し。

十四日 くもり、漸く俵來りて大宮へゆく。角屋に着きし時は四時を過ぎたり。さきの坐敷の先客あればとて二階なる一室に通されぬ。

十五日 晴、武甲山寫さんとして秩父神社のほとりにゆきしが位置あしく、割愛して小鹿野街道なる荒川の岸にて、汗ぬぐひつゝ一枚を寫す。繪の出來あしかりしも、暑さに苦しみし紀念としてはまた棄て難かり。

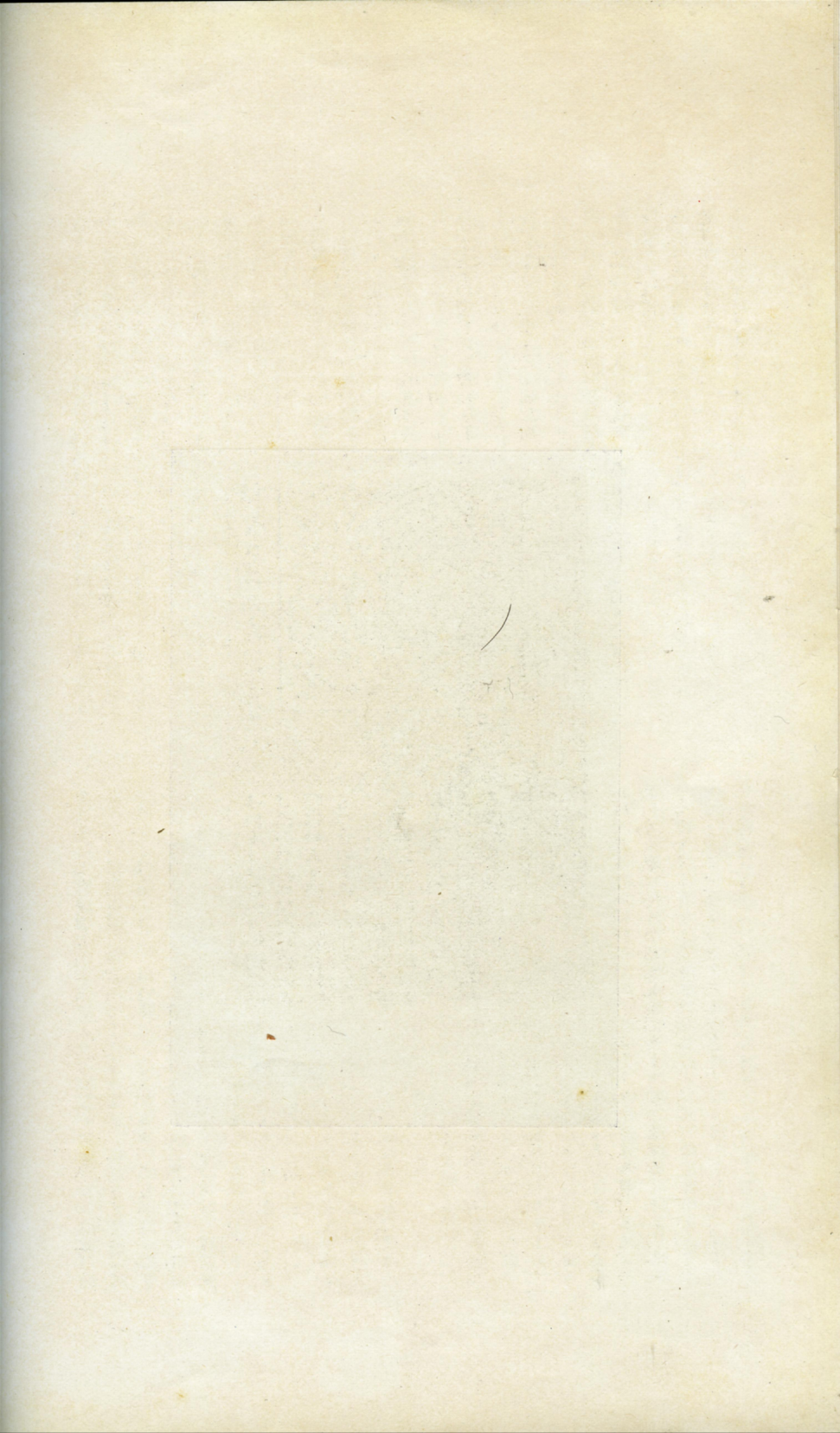
流行病視察のためとか、浦和よりあまたの警官來りしものから、室不足を告げて我れは前に居りし新坐敷の客と間を共にするととなりぬ。さて相客はと見れば、鼻下に髯蓄へし四十あま

りの尊大なる男にて、わたりに白紙筆洗など散らばり居るを見れば、遊歴の畫師にもや、我れを同じ類の穢するものと思ひてか、突然口を開きて、此地には見込なければ御忠告申さんと思ひし、自分も今度は失敗せり、一枚の畫に謝義は何程より持來らずなど問はぬと迄かたり、猶いくたの自慢話の後、三峰にては自分のあとより此近くの畫工の上り來りしと、自分には揮毫を乞ふもの頻りなりしも彼には其事なかりしと、此畫工に初めて面會せしとき、彼は名刺を持來りしが自分は與へざりしと、自己の宿所も言はずしてこなたの宿所を問ひしかば、其無禮を責めしとなど、くだ／＼しく語りぬ。我も初めは彼の名を問はんと思ひしが、これ等の話をききてその人柄をも解し得たれば、終に問はずして止みぬ。

十六日 曇、おり／＼雨あり。今朝は、畫師の昨日に引かへ馴れ／＼しく語りて、自分はこゝ住めば序もあらば立よられたしとて彼より名刺出しぬ。三峰にてありしといへることも思ひ出られていとおかし。

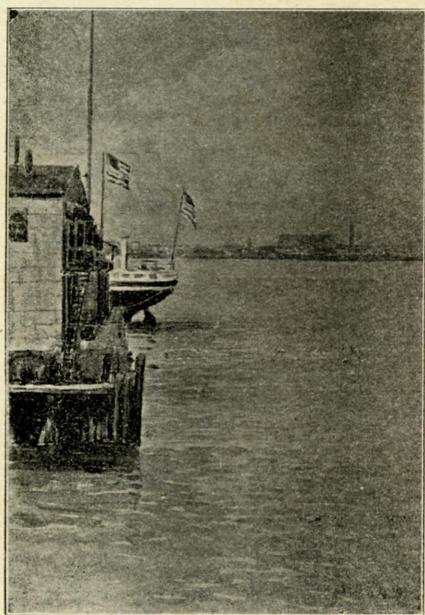
七時頃關氏來りて、山に霧深けれどいつ迄も滞留の身にもあるまじければ、近き名所を案内せんといはる。一冊のスケッチブック手にして關氏に従ひゆくと約一里、琴平山に出づ。石級登ると二丁餘、拜殿あり。更に三四丁にして奥の社に達す。銅にて作りし神像立てり。山を傳ひてゆくと數町、二十六番の觀音堂あり。危岩の間に建てられし丹色の殿堂、欄柵ちて納札の跡まだらに、楓樹影くらく苦滑らかに幽邃を極め、武甲山前に聳





えて秋の色を忍ばしむ。山を下りて本道をゆくと十餘町、左に折るれば二十八番の觀音堂あり。堂は直立二百餘尺といふ白色の大岩の下にありて、面白き位置をなせり。有名なる秩父の鐘乳洞はこゝにあり。入口と出口と離れて二つあるは、吾國に比なしと里人誇りぬ。案内者を頼み燭を燈して入る。狭き口を身をかゝめて進むに階子あり、七八級を下れば外部の光り全く遮られて、たゞ一種の燈のみ覺束なく照せり。こゝは疊十ひらを敷き得べき廣さにて、鐘乳石、石筍等あまたあり。案内の男竹竿の先に燭を結びて高くかざしつゝ、是は何、彼は何と形の似たるを佛の名として事々しく述べ立つ。更に階子を下ると數十階、或は廣く或は狭き洞穴の間を縫ふて、上り又下りとかくして出口に達す。出口は入口の反對の側山上に在り、初めてなればいと珍らしと思ひぬ。

他に見るべきものもなければと、元來し道を大宮へと歸りしが、途すがら小流あり橋あり水車ありて景色あしからず、秋にもならば再び遊ばんの心も起りぬ。



ボストン港の一景 松本喜八郎筆

十七日 壘、今日は都へ歸らんと思へは、とく起き出て仕度す。六時馬車に乗る。かの畫師も共に、車の上にて携えし毛布敷きて我に半座を頒つ。ゆられ／＼太駄に到り馬を代ふ。こゝに四人のホーカイ節あり、乗合の人々輿に乗じて小錢を擲つ。かの畫師いづこよりか梨を求め來りて我にも頒つ、重ね／＼殊勝なる振數とやいはまし。

車の本庄に着きし時、上野行の列車の動き始めぬ。一汽車おかれて宿に歸りしは、夕陽小西湖に赤く輝く頃なりき。

(終)

三浦のなみ

(その二)

△▲△

長坂といふ處で、寫生の届をするため駐在所へよつた。查公は脚を傷めて巡廻に出られぬ、退風だからとてお茶を仕れたり菓子を出したり話を仕かけて歸さない。終に二三枚この日のスケッチを見せたら、查公曰く『私は時々公用で見取圖をかゝられますが、あなたが三十分でお描きになつたといふ處を、私は合間々々ではあつたけれど丁度二日かかりました。巡查でも繪がかけないと困ります』とつく／＼羨ましそうにいふた。